

平成25年(ワ)第38号

「生業を返せ、地域を返せ！」福島原発事故原状回復等請求事件

原告 中島 孝 外

被告 国、東京電力株式会社

## 意見陳述書

2013年7月16日

福島地方裁判所民事部 御中

原告(原告番号 T-459): 樽川 和也



### 1 経歴等

私は、須賀川市内で7代にわたって農家を営んできた家の次男として生まれました。大学卒業後、しばらく会社員をしていましたが、2005年ころ、農業を継ぐことを決意し、今も母と一緒に農業を営んでいます。

### 2 原発事故前の生活

- (1) 原発事故前は、父、母と私の3人で畑を耕す毎日でした。米作はもちろん、須賀川市の特産である岩瀬キュウリのほか、キャベツ、白菜、ほうれん草などの野菜を栽培していました。
- (2) 父は、30年以上前から有機栽培にこだわり、有機質肥料を用いたり、自作の腐葉土などで土壌改良を重ねたりと、何よりも土づくりに力を入れていました。また、父は、10年近く試行錯誤を重ねて、須賀川地域では育てら

れなかった種類のキャベツを生産することに成功しました。父の作ったキャベツは、直売所でもすぐに売り切れ、地元の学校給食でも使っていただけでした。父は、「子どもたちが食べるものなのだから、気をつけて作らない」と口癖のように言い、安全な野菜作りを誇りにしていました。

私は、このような父の背中をずっと追いかけてきました。

### 3 原発事故直後の状況

(1) 2011年3月12日、父は、テレビで東電福島原発1号機の水素爆発の映像を見て、「俺の言っていた通りになったべ、人が作ったものは、必ず壊れるときがくる。世界で唯一の被爆国がなんでこんなに原発を作るんだ！馬鹿な国だ」と家族に話していました。父は、1988年に広島で開催された原水爆禁止世界大会に出席したあと、放射能や原発の危険性に関心をよせ、度々家族に話をしていたのです。私は、本当に父ちゃんの言っていた通りになったと驚くばかりでした。

(2) 父は、事故後、口数が極端に少なくなっていき、吐き気を訴えるようになりました。野菜の出荷停止が広がり始めると、「福島の野菜はもうおしまいだ」、「福島の農業で生活はできない」と話していました。

3月23日の夕方、須賀川産のキャベツなどを出荷停止とするという内容のファックスが自宅に届きました。その翌朝、父は、自宅裏の木の枝にロープをかけ、首を吊っていました。父の上着のポケットには、歩数計の機能の付いた携帯電話が入っていたのですが、画面には約700歩と示されていました。長年にわたって丹精を込めて育ててきたキャベツ畑を直前まで見て回ったんだと思います。

(3) 父が死んだ後になって、父は近所の友人に、「子どもたちに何にも残してくれらん（残してやれない）」と言って、泣いていたと聞きました。震災直

後には、父は「様子を見て少しずつでも出荷しないと」と言い、納屋の修理などに取りかかっていたのです。原発事故さえなければ、地震からは必ず立ち直っていました。父は、出荷停止のファックスを見て、今まで積み上げてきたものを一気に失ったような気持ちになったに違いありません。ロープで首を吊っていた父を発見したときのことや、父をロープから降ろしたときの気持ちは、言葉では言い表せません。

3月は、ちょうど「寒キャベツ」の時期で、7500株が育っていました。しかし、原発事故による出荷停止で、全てダメになりました。出荷停止で、育ちすぎたキャベツが、「パリッ、パリッ」と割れる音が、父が亡くなってからしばらく畑で聞こえていました。私は、その音を、「まるでキャベツの悲鳴だな」と思いながら聞いていました。

しばらくして、キャベツ畑は花畑となりました。一面に広がる菜の花に似た黄色い花を見て、「おやじのキャベツ、本当に食べらんなくなっちゃったんだな」と思いました。私と母は、花が咲いてしまったキャベツを、父が丹誠込めて作ったそのキャベツを、すべて捨てなければなりませんでした。作業の間は、消費者においしく食べてもらいたい一心で農作業に打ち込んでいた父の真剣な顔を思い出し、悔しさと悲しさの織り混ざった何とも言いようのない気持ちでいっぱいになりました。私と母は、父が丹誠込めて作ったキャベツを捨てなければなりませんでした。

#### 4 原発事故後の生活

- (1) 父を失ったため、農作業の内容を決めるにも一苦労で、父の遺した作業日誌を見ながら、母と2人で懸命に土を耕しています。経験が浅いがゆえ、作物を見て、何が足りないのか、どんな作業を施せばいいのかの見極めがで

きません。出来ることなら、父から教わりたい、と何度思ったことか分かりません。

(2) 私は、父と同じように安全な農作物を作るため、なるべく化学肥料や農薬を使わないようにしています。父の農業への思いと父や先祖が大切に育ててきた土を守りたいからです。

しかし、いくら化学肥料を使わないようにしても、放射性物質で汚染されていけば意味がありません。放射性物質を除去するためにいろんな方策をとっていますが、なかなか効果がありません。今年は、農作業を始める前に、田畑を深く耕し、ゼオライトを撒きましたが、その後、検査したところ、セシウム137が845Bq/kg、セシウム134が483Bq/Kg 検出されました。近所の除染していない田からは2800Bq 出たと聞いているので、それよりはましですが、もとの土壌とは比べものにならないほど高い数値で、とてもがっかりしました。

また、農作業では、どうしても土に触れざるを得ず、土を耕すときには、土埃が巻き上がるため、それを吸い込んでしまいます。毎日のように汚染された土を体内に吸収し、また、直接接触して、健康に影響がでないのか、毎日不安を持ちながら、農作業をしています。

父が作り上げてきた消費者からの信用が途絶えるのが惜しくて、母と二人で、不安や苦勞を抱えながら、仕事をこなしてきました。しかし、自分たちで作った作物ですら、出荷してもいいのか、自分たちで食べて安全なのか、いまだに迷う日々が続いています。

## 5 最後に

今回の事故の後始末は、お金を払えば終わりの話ではありません。それまで代々育ててきた安全で豊かな土壌など失ったものははかり尽くせないほど大

きく、私たちが受けている苦痛は、金銭で評価しつくせるものではないからです。

何より、私の父は原発に殺されたと思っています。

私たち遺族は、父の死後、原子力損害賠償紛争センターに和解仲介の申し立てをしました。センターでは、審理の結果、原発事故と父の死の間に相当因果関係があると判断しました。しかし、東京電力は、私たち遺族に対して遺憾の意を表することすら拒んでいます。金さえ払えばいいという態度で、腹に据えかかっています。私たちの元に父を返してもらいたいと思います。

事故から経って、国は、各地の原発を再稼働させようとし、そのうえ、あろうことか、よその国に原発を輸出しようとしてさえしています。これほどの事態を引き起こしたにもかかわらず、なぜそんなことができるのか。結局は、今回の事故は、他人事なのでしょうか。

私たち百姓にとって、土や環境は、命の次に大事なものです。放射能で汚された環境を元に戻してほしい。そして、父が言っていたように、原発はなくさなければならぬ。それが私の願いです。

以上